

令和8年度(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 審判員共通認識事項

本共通認識事項は、令和5年度にコロナ禍で開催された四国全中をきっかけに、審判員のみならず、日々の稽古など様々な場面で、選手や指導者が共通の認識を持ち、一体となって「正しい剣道」、「正しい試合」を醸成していくために作成されたものです。地域クラブとも連携を図り、広く周知していただきますよう、皆様の御協力をよろしくお願いいたします。

1 (公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 ブロック長会議より

- (1) 全日本剣道連盟 (R6.9.9 発出)『剣道試合・審判・運営要領の手引き』の改訂に係る確認事項について
- つば(鏢)競り合い解消に至る時間は「一呼吸(3秒程度)」。
 - つば(鏢)競り合いを解消する場合は、正しい鏢競り合いから鏢と鏢で競り合う力を利用して積極的(一気)に解消する。
 - つば(鏢)競り合い時の**発声**については、「指導」や「反則」とはしないが、鏢競り合いは互いが最も接近して緊迫した**状態**であることから、日頃の稽古や試合においては極力発声しないよう指導する。
 - 審判員の移動・交替要領・団体試合の整列方法に関しては、「暫定的試合審判法」実施以前に戻す。「剣道試合・審判・運営要領の手引き」p15 図の通りとする。
 - マスクの着用について
 - ・引き続き、面マスクまたはシールドを着用する。
- (2) 団体戦の代表者戦、個人戦での延長戦について
- 延長戦は2分ずつ区切って行う。
 - ・ 試合時間3分⇒延長2分⇒延長2分⇒【小休止(深呼吸をする程度)】⇒延長2分⇒延長2分⇒【休憩(面を外して給水)】
 - ※上記を繰り返す。
 - 【小休止】 ⇒ 開始線の位置で10秒程度の深呼吸。
 - 【休憩】 ⇒ 立ったまま納刀し、待機場所に戻って面を外し、所定の場所(※1)で水分補給を行う。試合再開までの時間は5分とする。(※2) その際、監督は選手に指示をしない。
 - ※1・給水場所については、会場の状況や使用上のルールに応じて決める。
 - ※2・計時については、試合場主任もしくは時計係が所定の場所で計測する。
- <審判員の所作>
- 【小休止】 審判員は試合者に「その場で深呼吸しましょう」と促す。
 - 【休憩】 左手に審判旗を持ち、右手を右斜め下方に伸ばし、手の平を下に向け「休憩」と宣告する。
- (3) 裏交差について
- つば(鏢)競り合いの際、裏交差になっている場合は、正しいつば(鏢)競り合い(表交差)に戻してから、或いは戻しながら解消する。再三繰り返したり、意図的な行為と判断されたりした場合は、合議の上、反則を適用する。
 - 裏交差のまま分かれると直ちに反則になるのではなく、意図的に裏交差にする場合や、一方が表に戻そうとするところを合わせずに分かれる場合などを繰り返し、明らかに公明正大に試合をしていない場合について反則の対象とする。

2 審判員共通認識事項

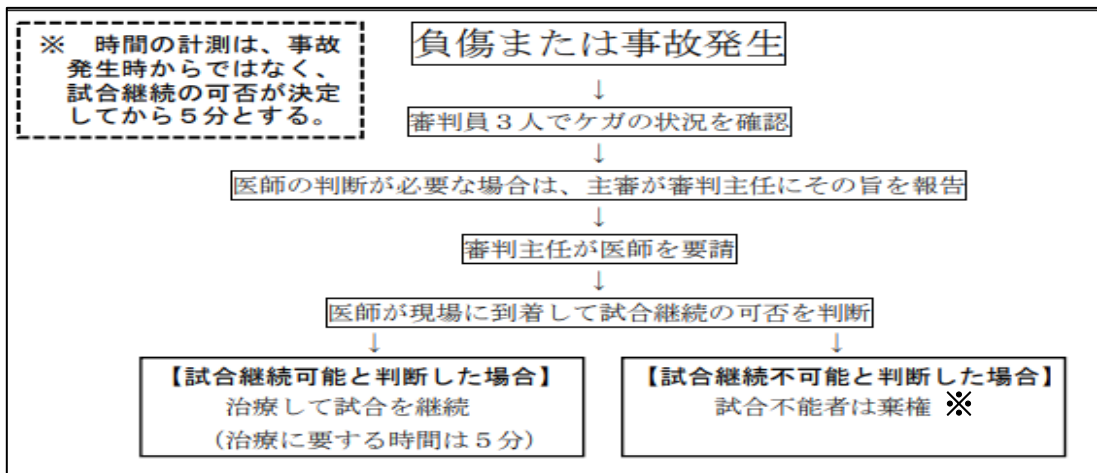
- (1) つば(鏢)競り合いについて
- つば(鏢)競り合いの定義
- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P9 三「規則の解釈と運用」 2「つば(鏢)競り合いについて」
つば(鏢)競り合いは、鏢と鏢とが競り合って互いが最も接近して緊迫した**状態**である。つば(鏢)競り合いは攻防や打突行動の中から発生した相対関係である。

- (6) 「公正を害する行為」と「時間空費」の見極めについて
- 時間空費を目的として公正を害する行為を行うことも考えられるため、総合的に判断する。
 - 公正を害する行為
 - ・ 意図的に表から裏交差にする行為
 - ・ 分かれる際に不要な動き(おさえる、巻く、逆交差にする、肩にかけて分かれるなど)をする行為
 - 時間空費
 - ・ 意図的にゆっくり下がる。または、相手を下がる行為
 - ・ 勝負の回避、手元をあげて相手に接近する行為
- ※ 審判3名の中で、2名は時間空費、1名は公正を害する行為というように判定が割れる場合もある。
- (7) 合議について
- 合議の最中にジェスチャーは行わない。口頭で合議を行う。
 - 合議は相談ではなく、確認である。短時間で行う。
- (8) 合議後の説明から反則の宣告までの流れについて
- 合議後、主審は定位置には戻らず、その場で選手を待つ。選手が開始線に出てきて構え直したら近付いて説明を行う。その後、定位置に戻り、旗表示をした後、反則を宣告する。
- (9) 反則を適用する際、反則名は宣告するのだろうか
- 選手に説明をしたうえで「反則1回」と宣告する。(反則内容は監督にも聞こえるように説明する。)
- (10) 「押し出しの反則」なのか「場外反則」なのかの見極めについて
- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P26 〈主な事例の解説〉
- 〈事例5〉体当たりと押し出しとを区別する判断の基準はあるか。
- ① 打突後の体当たりや相手を崩して打突するなど、打突に結びつく行為でなければ不当な押し出しになる。
 - ② 打突の意志がなく、押し出す目的であったのか否かを見極める。
 - ③ 堪えられる程度の接触なのか否かを見極める。
- (11) 竹刀を落とした場合の判断について
- 竹刀を落とした者の「反則」とする。ただし、故意に相手の竹刀を落とすことを目的とした行為(何度も竹刀をたたき、竹刀をひっかける等)であれば、公正を害する行為として、その行為を行なった者の「反則」とする。
- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P25 〈主な事例の解説〉
- 〈事例3〉一方が自分の竹刀で相手の竹刀を強く叩いて落とした。強く叩いた側が反則になるか、それとも落としてしまった側が反則になるか。
- ① 攻防の中で叩いたのであれば不当な行為にはならない。落とした側を反則にする。
 - ② 強く叩いた行為が見苦しい場合は、第1条の本規則の目的に照らして反則にする。
- (12) 変形な構えに対する左小手への打突について
- 有効打突の要件・要素を満たしていれば1本となる。
- (13) 倒れたとき、うつ伏せ等による相手の攻撃に対応する意志が見られない行為は、反則を適用する。
- 「全日本剣道連盟剣道試合・審判規則」 P11 細則 第16条5
- (14) 片手を放しての防御姿勢について
- ・ 返し胴を打突した後など、後打ちを避けるために右手で竹刀を持ち、竹刀および右手・右腕で面、柄部で小手、左腕で胴を隠して防御する行為。
 - ・ 身体接触等で崩されて片手が竹刀から離れた際、同様な形で相手の打突を避けようとする行為。等
- 一瞬ではなく一定時間以上その姿勢を取った場合、原因と現象を見極めて反則を適用する。

(15) 負傷または事故発生時の対応について

※(公財)全日本剣道連盟剣道試合審判規則・規則第2節「審判の処置」による。

① 試合者が負傷などした場合は、次の要領で処置をする。



② 審判員は、試合継続の可否判断が下されるまで試合場内に留まる。

③ 相手選手については、そのときの状況により、審判主任の判断で対応する。待機中、監督からの指導は認めない。

④ 試合継続の可否判断が下された後の審判員の動きについては、試合者に準ずる。

【上記表※の補足】

- ・「**棄権**」とは、その試合に対する判断であり、団体戦においてはその後の回復状況によって医師および審判員の判断、並びに監督(保護者)との相談の上、その後の試合に出場することができる。
- ・負傷により試合が継続できないとき、その原因が一方の故意および過失による場合は、その原因を引き起こした者を負けとし、その原因が明瞭でない場合は、試合不能者を負けとする。
- ・加害者として負けとされた者は、その後の試合に出場することができない。

(16) 異議の申し立てについて

「全日本剣道連盟剣道試合・審判規則」 P22 規則

第35条 何人も、審判員の判定に対し、異議の申し立てをすることができない。

第36条 監督は、この規則の実施に関して疑義があるときは、その試合者の試合終了までに、審判主任または審判長に対して、異議を申し立てることができる。

○ 規則の実施に関して、監督自身の理解が不十分な場合や、選手を一旦落ち着かせるような意図などで異議の申し立てが行われる疑いがある時などは、審判主任や審判長は毅然と対処する。

(17) 主審の専決事項と副審からの合議について

○ 「剣道試合・審判規則 同細則」 P18 第2章審判 第1節審判事項

「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P8「合議」

○ 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P11、P30、32、33、34〈事例4〉〈事例6〉〈事例7〉〈事例9〉

・ 「膠着」や「不当な鏝競り合い」に関する処置は、試合の運営にかかわる主審の専決事項である。

・ 「意図的な時間空費」、「防御姿勢による接近する行為」に関する処置も、試合の運営にかかわる主審の専決事項である。

○ 「剣道試合・審判規則 同細則」 p16 規則

第24条③「副審は…主審の補佐をする。なお、緊急のときは、試合中止の表示を宣告することができる。」

・ 上記に示した主審の専決事項以外で、危険・違法・不当な行為があったとき。(場外に出たか出ていないか、竹刀を離し操作不能になった、相手の竹刀を握った、刃部を握ったなど、見落としや見誤りがあった場合など。)

○ 一方の試合者が不利益を被るようなことはあってはならない。上記に示した主審の専決事項や副審の任務についての共通理解を図った上で実施する。

(18) 審判旗の巻き方について

- 審判旗の巻き方(縦巻きか横巻きか)は、大会ごとの申し合わせ事項により決定する。

(19) 「変形な構え等の防御姿勢」について

- 「変形な構え」で微妙な場合は複数回見ること。明らかな場合は即指導をとる。左拳の位置、剣先(けんせん)の下がり具合が判断基準となるが、微妙な形を繰り返す場合、合議を掛けて確認をする。
- ※ 変形な構えによる防御姿勢で相手に接近するなど、意図的に勝負を回避する行為は反則を適用する。

(20) 試合開始時の蹲踞・「始め」の宣告について

- 正しい蹲踞、竹刀と目印をきちんと確認してから「始め」の宣告を行う。
- 開始線で蹲踞もしくは構えた状態で、選手の竹刀や体が動いている場合はきちんと静止させる。
 - ・ この徹底により、試合者が正しく構えて打突動作に入ることができる。構えが成立する前に打突動作に入った場合は、ただちに主審は「止め」を宣告する。もし、打突が当たったとしても有効打突として認めない。その後、試合者に指導したうえで再度「始め」を宣告する。このとき、試合者に再び蹲踞をさせる必要はない。
- 終了時は、蹲踞の姿勢で納刀し、右手を太ももに置いてから立ち上がる。正しい動作が行えない場合はその場で指導し、やり直させる。
- 膝の怪我などで正しい蹲踞ができない場合の対応について
 - ・ 試合が始まる前までに、監督が各試合場の審判主任に申し出る。
 - ・ 審判主任は当該試合の審判員と対戦校の監督にその旨を伝える。

(21) 団体戦における先鋒戦の開始の宣告について

- 大会運営をスムーズに行うため、監督が畳に座ったことを確認してから「始め」の宣告を行う。
 - ・ 監督は、チーム間の始めの礼の後、速やかに前列畳に移動し、選手を待たずに着座する。
 - ・ 選手は、前の試合のチーム間の終わりの礼の後、直ちに2列目の畳から立礼の位置へ移動し、チーム間の始めの礼を行う。面・小手・竹刀の移動は、チーム間の礼が終わった後に行う。

(22) 団体戦で、どちらかのチームまたは両チームが3名か4名の場合の始めの礼について

- 両チームの中堅までの選手は面・小手を着用し、竹刀を持って始めの礼を行う。

【本件に関する問い合わせ先】

(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部長

阿見町立朝日中学校 校長 山下 克久

TEL 029-842-7771

FAX 029-842-2865

Mail yamakatu.4266@gmail.com

※原則、各地区ブロック長や各県専門部長を通してご連絡ください。